

垂水史談会報

第48号
2022(令和4)年
11月発行

【報告】

「垂水のうたびと」展

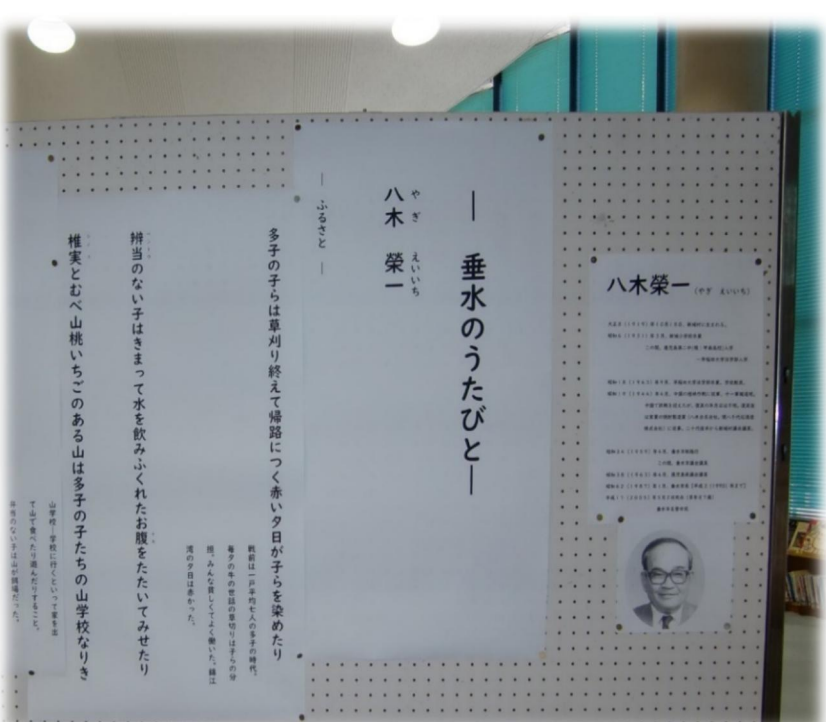
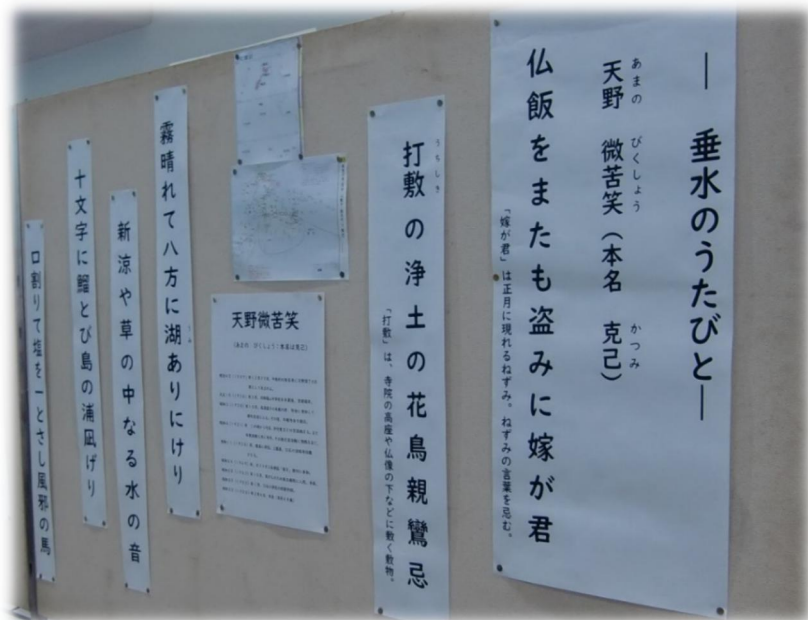
第一回は天野微苦笑(俳句)・八木榮一(短歌)両氏

垂水史談会では、垂水の先人たちが残した文芸を広く市民に紹介しようと十月中、市立図書館で「垂水のうたびと」展を開催しました。

第一回目は俳句の天野微苦笑氏と短歌の八木榮一氏の作品を紹介。

天野微苦笑氏は垂水市二川の西宝寺の次男として生まれ、俳句のほか、様々な文芸に手を染めました。また、牛根の境小学校や百引の岳野小学校、甌島の江石小学校の校歌の作詞も手がけています。しかし、病気のため、昭和三〇年に四十八才の若さで亡くなりました。作品に「一湾に響く喚鐘鳴日和」ほか。

八木榮一氏は新城の造り酒屋に生まれ、昭和十五年、早稻田大学法学部へ入学。戦況の悪化により昭和十八年九月卒業とともに学徒



七才で亡くなりました。

作品に「特攻の広西学生軍撃ちて的をはずしき我も学徒兵」

出陣、翌十九年には中国桂林作戦に従軍。中国で終戦。帰還後は家業の傍ら垂水市議、鹿児島県議、垂水市長等を歴任。垂水名誉市民にも選ばれ、平成十七年に八十

ほか。

【研究ノート】

— 沖縄の本土復帰五十年に —

今年には沖縄が米占領下から日本に復帰して五十年の節目に当たります。垂水の歴史・文化で沖縄に関連するものを探してみたいところ、垂水家第十代・島津貴澄の『麿麓詩稿』中に次の漢詩が入られています。

藩制時代には、現在の県民交流センター(旧県庁跡地)に垂水島津家の屋敷があり、すぐ北隣には琉球館がありました。また、瀬戸口藤吉の父、覚兵衛氏は「鹿児島市小川町の琉球館の役人で、琉球館に住んでいた」と伝えられていることから、垂水と琉球との関係は今後研究の余地がありそうです。

(ただし、読み下し、口語訳は未定稿)

過琉球客館観舞樂

島津元直(貴澄)

偶問中山使	羈棲爾可親
朱門堪繫馬	画閣正留賓
杯設西洋器	盤盈南海珍
舞酣高燭影	歌起動梁塵
寶帶兼腰曲	金釵結髮新
能憐同社輩	寧隔異鄉人
投轄歡愈熟	解衣情倍眞
笑談忘五夜	不覺醉清醇

【読み下し】
琉球客館を過りて舞樂を觀る

偶^{たま}ま中山使を問う。羈^{きせい}棲、爾れ親しむ可し。

朱門は馬を繋ぐに堪え、画閣は正に賓を留む杯は西洋の器を設け、盤は南海の珍に盈つ。

舞酣にして燭影を高からしめ、歌起りて梁塵を動かす寶帶、腰を兼ねて曲り、金釵、髪を結びて新し。能く同社の輩を憐れめば、寧ぞ異郷の人を隔てん轄を投じて歡、愈よ熟し、衣を解きて情、倍す眞なり。笑談、五夜を忘れ、不覺にも清醇に酔う

【注】

○中山使・中山国(琉球)からの使者。○羈棲・故郷を離れて他国に住んでいること。○画閣・絵に描いたように美しい高殿。○梁塵・部屋の梁に積もった塵。○寶帶・宝石で飾った帯。○金釵・金のかんざし。○同社・社稷、ここでは薩摩の版図を同じくする意か。○投轄・客の帰れないようにすること。轄は車が車軸から抜け落ちるのを防ぐくさび。○五夜・一夜を五つに分けたものをまとめた呼称。○清醇・清く澄んだ酒。泡盛。

【口語訳】

たまたま、琉球の中山国の使者を訪ねた。故郷の琉球から遠く離れ、薩摩に寄寓しているからには、親しく交際しなければなるまい。朱色の門構えは、馬を繋ぐには丁度よく、絵に描いたように美しい琉球館は、まさに訪問客を留めずには置かない。杯には西洋渡来の器が用意され、皿の上は南海の珍しい食べ物に満ちている。琉球の舞は、今やたけなわにして灯りに写った影が高く踊り、歌は起こるや部屋の梁の塵をも揺るがすほどで

ある。
寶石で飾った帯は腰とともに揺れ、金のかんざしは髪を結んで真新しく輝いている。同じ薩摩の版図にあるともがらを大切に思うならば、どうして異郷の琉球びとを隔てるものがあるのか。帰ることを忘れて、宴の喜びはいや増しに慣れ親しんでくるのである。着衣の帯を解いて交情はますます、まごころの交わりとなる。笑談して夜の更けるのも忘れ、不覺にも泡盛に酔ってしまったのだ。

(瀬角)

【垂水市史料集(一)】より

西南之役 私学校生徒の従軍譚 ④

—立山健氏への聞き書き— (山口栄之 筆記)

かくて午後三時頃、夫卒が飯を竹籠に容れて担って来た。それが待ちに待った昼食である。夫卒が「何番隊の方々は何処にか」と、言わせも果てず「何番かん番もあるものか、早く此方へよこせ」と奪い取るごとく受け取ってみると、その飯といふのはまるで粟ばかりの物であった。それでも昨夜来、食わずに歩いたので極度に空腹を覚えていたから、只もう貪り食ってしまったのである。

暫く経つてようやく味方の大砲が到着したらしく、初めて味方の方から発砲する音がし出した。一同、踊りあがって嬉しかった。日暮れ前に戦いが止んで引き上げとなった。味方の隊はただ散々に崩れていたが、安政橋に来た時ようやくまとまった。そしてその夜はその河原に露宿したのである。

小倉鎮台 植木 田原坂 木葉町 南の関

翌十一日(新二月二十三日)未明、小倉鎮台が来たというのでそれに向かって繰り出されたので、だんだん進んでいくと、先発は既に植木で衝突したといって途中陸続として死傷者を運んで来るのに出会った。

向坂という所まで来ると今度は敵の殪れているのが多かった。ある一か所では十八個も遺棄されているのを見た。ようやく昼前の十一時ごろ植木に着いたが、もう官軍の影もなくそこで休

西郷南洲翁仮宿跡

大都在住の上田正輝氏の曾祖父は親豊といった。親豊氏のところに、西郷南洲翁がよく狩りにきて宿泊されたと言われている。

正輝氏の曾祖母の弟で鹿児島市在住の市之助という人がいた。市之助は戊辰の役の際西郷に従って出征した経歴もある。西郷は征韓論に敗れ、下野し県下のあちこちで狩りをしたが、その際市之助は伴人を良くつとめたという。

明治7(1874)年、西郷が新城に狩りに来た際、市之助は姉の家(上田家)を訪れた。この後、西郷は度々上田家を訪れるようになったと言う。

このことを知った安田為備氏(当時の戸長)や中村清徳氏(安田氏の前の戸長)は、上田氏と一緒に西郷を歓迎したと言う。また、狩りの御供役として、新城の狩りの名人鹿屋駒之助氏、兎取りの名人中園休次郎氏、鉄砲うちの人名榎屋与助氏の3名が西郷に同行したと言う。

上田家には、西郷が狩りやいか引きを楽しんだとか、狩りのときの昼飯として出した梅干し入りのおにぎりを喜んだとかいう話が伝わっている。

平成24年10月 垂水市教育委員会

んでいると、午後三時ごろになってまた来たというので直ちに出發し、今度は田原坂で衝突したが容易く撃退し、追撃しつつ木葉町に入った時は夕方であった。ここでは銃器弾薬の分捕り夥しく、なお追撃を続けて南の関の手前まで行き、そこから引き返して植木に来て休息した。

翌十二日(同二十四日)は雨の降る日で、戦いもなかったから分捕り品の分配などがあった。自分は戦友・安田次郎兵衛殿が昨日の戦いで腕に負傷されたのでその看護を命ぜられた。

鍋田河原の激戦 蜂須賀某の剛気

十三日(同二十五日)は山鹿に行つて、翌朝、鍋田河原という所から大進撃が開始された。

この日の合戦すこぶる烈しく、わが半隊長なども討ち死にした。またまた大勝利であつて、敵の遺棄死体は南の関の手前の腹切坂までの間に八十六個を数えたほどである。

その日はまた山鹿に引き上げたが、そのまま隊を組んで来いとの本営の命であるというので、「今日の戦いは見事な大勝であるから、これは必ずご馳走でもして大いに犒われることであろう」と思っていたところ、豈図らんやで、平野壯介隊長の曰く「斬り込めと命ぜられて直ぐ斬り込まぬのはイカン。他の隊はどうあろうとも、わが第七中隊だけは真つ先に進んで斬り込みにヤイカン。」

【お知らせ】— どなたでも参加は自由です —

毎月第四水曜日・午後六時半から、垂水市市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の研究会を行っています。当面『垂水島津家』を中心に垂水の歴史をひもといて行きます。

今度もし進まぬ者がある時は、後ろから切り捨てるぞ。特に田舎ん衆はヤッセン。」と以ての外のことである。

面くらつて一同恐縮するかと思うとこれまた意外、「田舎ん衆との一言はけしからん」と、鋭き憤怒の声を発して詰め寄るものがあつた。そして「斬り込め、の号令があつても逡巡して進まんのは、むしろ御城下の人たちである。それに何ぞや田舎ん衆とは言語道断、侮蔑極まる。ヨシ然様仰せらるるなら、今後必ず城下ん衆が真つ先に斬り込まれるか、改めて拝見しましょう。そこで若し進まぬ方があつたなら、この田舎者の我が輩、これを斬り捨てるぞ」と、大いに威嚇した。その面上には小鬚の負傷で血塗れになったか、あるいは敵を斬った時の返り血を浴びたか、まるで赤鬼のような物凄い形相である。されば、さすがの御城下兵児等も辟易したと見えて、誰も一言酬いるものがなかつた。我々田舎者の方では痛快この上もないことであつた。さてこの人は頼娃の蜂須賀某という豪傑であつた。この人、初めは押伍であつたが、後には小隊長になったようである。因みに云う、我が第七中隊は遊撃隊であつたのである。

*押伍・兵隊が落伍しないように監督する任務の兵。

(—以下次号—)